

第13回評議員会 報告

日時：2026年2月1日（日）10:00～11:45

場所：東京国際フォーラム

出席者：藤井千春、長谷川眞理子、竹本織太夫（以上評議員）、
清村百合子（代表理事）、宮澤多英子、（常任理事）

評議員会では、学会の運営体制はじめ、研究の方向性や日本の学校音楽教育が今後目指すべきものについて、外部委員の先生方から多様なご意見をいただくことを目的としています。今回は主にAI時代における学校教育のあり方を中心に、「対話」や「プロセス」、「直接経験」の重要性についてさまざまな観点から自由闊達にご議論いただきました。

竹本織太夫氏からは、伝統芸能ならではのコミュニケーションの取り方（師匠とのやりとりなど）こそ、対話やプロセスが重要になるが、それが今後失われていくことを危惧するとの意見がありました。一方で、石見神楽と義太夫との共演の機会があった際、地元で生活する子どもたちはスマホより神楽の道具を欲しがっているという話を聞き、やはり環境や人とのつながりが伝統芸能にとって重要なんだということを考えさせられたとのお話がありました。

また教育学者の藤井氏からは、このような世の中であっても「つながりたい」という人間としての欲求はまだ持っている、そこに期待したいとのご意見がありました。そこで大事なことはどうつながるか、そのつながり方が大事なのではと。また学びの体験として、学習者は試行錯誤し、自分の感情を動かし、試練を乗り越えていくという経験が大事なのではないか。つまりは泥臭さというか、自分の身体を使ってそこで感情も動かしていく、そういう探究が本来あるべきなのではとの話がなされました。

また自然人類学がご専門の長谷川氏からは、いま世界では言語や尺度などを標準化していく動きが加速しているとのお話がありました。ヒトは本来50～100人程度のグループの中で生きてきたが、今はオリジン（起源）の分からない人が大規模な社会で住むようになり、その社会を動かすために共通性や標準化を取り入れる必要が出てきたと。しかしヒトの身体のつくり、脳のつくりは何万年前と比較してもそう大きく変わるものではないため、そもそも50～100人程度のコミュニティで生きていたヒトにとっては、現代は相当なストレスフルな世界になっているとのことでした。

評議員会の最後にはこのような時代だからこそ、実体験や直接経験が重要になってくるのではという議論へと収束しました。自分の足でデータを稼ぐこと、自分の身体を通して世界を感じること、そこで多いに感情を動かす経験をすること、といった経験を子どもたちに期待したいと。音や音楽との直接経験が学習の主軸となっている音楽科の授業こそ、今失われつつある環境を子どもたちに与えることができる教科なのではと考えさせられた会となりました。

